



Title	夕形の長期記憶参照標識機能
Author(s)	加藤, 重広
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 127, 1(左)-27(左)
Issue Date	2009-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35667
Type	departmental bulletin paper
File Information	KAT0.pdf



夕形の長期記憶参照標識機能

加 藤 重 広

本論¹は、日本語において用言に後接する「た」の第3の用法として、長期記憶参照の情報であることを示す機能があることを提案し、関連して記憶種が語用論的に見て重要な要素であること、この用法の逸脱的な使い方として近年見られる「丁寧の夕」が説明できることを述べるものである。

1. 語用論における長期記憶

1.1. 心理学における考え方

認知心理学では、記憶を短期記憶 (short-term memory; STM) と長期記憶 (long-term memory; LTM) に分けることは一般に行われていることであるが、実のところ、両者の機能や構造が心理学において一義的に確定しているわけではなく、そのまま言語学、とりわけ語用論の研究で利用できるかどうかは検討を要する。認知心理学では、変異はいろいろ見られるが、記憶を3分類し、感覚器における瞬時の記憶たる直接記憶 (immediate memory)²に《短期記憶》と《長期記憶》を加えて3段階とすることが多いようである。

このうち、長期記憶についても、陳述的記憶 (declarative memory)³と手

¹ 本稿は、加藤重広 (2004a) をベースにまとめた加藤重広 (2008) を論文の形に改稿したものである。

² あるいは「感覚記憶」 (sensory memory) とも呼ばれる。

³ declarative memory については「宣言的記憶」という訳語も見られる。また、「認知的記憶」 (cognitive memory) とも呼ばれることもあるようだ。訳語については、ここでは重要な問題としないが、declarative は declarative sentence が「平叙文」を意味する

手続き的記憶 (procedural memory) という区分が立てられている (Anderson (1980))。出来事や知識の記憶である前者に対して、後者は運動技能や習慣に関わる身体的な記憶とされる。さらに、陳述的記憶は、意味記憶 (semantic memory) とエピソード記憶 (episodic memory) に下位区分されることが多く、近年いくつかのデータからこの区分が重要であることが確認されているという。意味記憶は「知っていること」の内容であり、その集積であるが、エピソード記憶は「覚えていること」の内容で特定時に特定の場で生じたできごとに関する記憶の集積である。エピソード記憶は人間に特有のもので、意味記憶は人間以外の動物にも見られるとされる。言語は、人間の場合、いずれの記憶にも深く関わるが多いが、言語がなくてもいずれの記憶も成立しうると考えられている。

また、近年、主に長期記憶において、記憶しようという意思のもとで記憶する explicit memory と、無意識のうちに記憶してしまう implicit memory を区別することが行われ、神経心理学的な実証も継続に提示されている⁴。

1.2. 言語研究における「記憶」

言語研究で記憶の機能と言語形式の関係をとり上げることは少なかったように思われる。もちろん語用論の領域に記憶という概念や用語を導入した研究がないわけではない⁵が、現状では顧みられることは少ないといっていだろう。加藤重広 (2003) では、長期記憶と短期記憶という区分が語用論で利用できる可能性を示し、以下のような区分を導入している。

ように、単純な平叙の形式の文を想定していることは踏まえておく方がよいように思われる。意味論や語用論の立場からすれば、収蔵されている記憶が平叙陳述の文の形式になっており、一般に命題と見なしてよい内容や特性を備えていると考えることができる。

⁴ 本節の記述には、引用した文献のほか、荳阪満里子 (2002) と Wilson & Keil (ed.) (1999) を適宜参照している。

⁵ Yoshimoto (1991) では、指示詞の分類に STM と LTM の区分を利用している。坂原茂 (2006) でも言語処理モデルに記憶領域を用いており、田窪行則 (1996) を含む田窪の一連の研究でも導入されている。

(1) 加藤 (2003) における短期記憶と長期記憶

短期記憶とは、当該の談話のなされる場で得られる情報が収蔵された情報の集合である。ここに含まれる情報はすべて活性化されている。長期記憶とは、当該の談話がなされる以前に会話の参加者が持っている知識であり、ここに含まれる情報の一部は活性化されているが、活性化されていないものも含まれている。

短期記憶の中に収蔵されている情報は、談話の場にあつて常に参照できる形になっており、活性化された状態にあると考えられ、これに対して、長期記憶内の情報は、そのときごとに活性化されているものが異なると考えられ、活性化の度合いの高いものから低いものまで一定の序列が想定できるという(加藤 (ibid: xiv-xv))。さらに、加藤 (2003) では、他の情報の活性化を生じさせる情報を誘因子 (trigger) と呼んでいる。もちろん、短期記憶情報がすべて活性化されているにしても、同じ度合いで活性化されているわけではなく、長期記憶の活性化の度合いも連続的に考えられている。

これに対して、Chafe(1994: 71 ff) は、情報の given/new の区分を active/inactive に対応させる考えを更に発展させ、その中間に accessible なものを semiactive な情報として想定している (Chafe(1994: 73))。この枠組みでは、ある時点 (t_1) における 3 種類の情報の状態が、一定時間が経過した時点 (t_2) において、active なものが active のままであれば given というステータスを得、semiactive なものが active になることで accessible というステータスを得、inactive なものが active になることが new というステータスを情報に得させると考えられる。

この Chafe (1994) の枠組みは、そもそも「記憶」を「場所」に準えてとらえる考え方に与せず、記憶の種別としてこの問題を検討するべきでないと思っていると思われる。この given/accessible/new を加藤 (2003) で言う記憶種別で分けると、given(active → active) は長期記憶と短期記憶に、accessible (=semiactive → active) も長期記憶と短期記憶に、new (=inactive → active) は短期記憶へ振り分けられることになるだろう。しかし、本稿では、

加藤 (2007a, 2008) に従い、加藤 (2003) とは若干枠組みを変えているので、整理し直したい。

加藤 (2003) の長期記憶は、活性化されている active な情報とそれ以外の活性化されない大多数の inactive な情報が混在していると考えられている。しかし、長期記憶に収蔵されている以上、「知っている (known)」ことではある。長期記憶にあつて、知ってはいるが、すぐに推論に使えない状態にある情報を「活性化されていない」「未活性」などと表現してきたが、これは、inactive ではあるが accessible なものと考えられる。

一方、長期記憶になく、あらたに聞き手からもたらされた情報は、もたらされた時点で談話記憶 (discourse memory) に収蔵されると加藤 (2007) などでは考える。談話記憶は、加藤 (2003) での短期記憶に相当する概念に修正を加えたものである。それまでに存在しなかった情報は加えられた時点で、new となるが、加えられたあとは談話記憶において active である。加えられる前は存在していないので、inactive ではなく「未取得」とするべきであろう。

given の情報は、談話のセッション開始後に与えられたものなら、形式文脈という短期記憶に収蔵されており、談話の中で与えられていないのであれば長期記憶内の知識だと考えられる。長期記憶のなかの active な情報は、それ以前の他の情報によって関連情報として活性化されたものも含まれる。このとき何が trigger になっているかは、別の機会に考察をすることにする。短期記憶内の情報がすべて活性化されているのであれば、利用可能な情報は長期記憶内にのみ存在することになるが、短期記憶内で相対的に重要度が低く活性が下がっている情報が存在するのだとすれば短期記憶内にも「利用可能＝半活性」と定義できる情報があると考えることが可能である。

従来、「は」と「が」について、前者を既知 (given)、後者を新規 (未知) (new) をマークとするとする仮説が出されたことがあるが、これは以下のような例文ではうまくいかないところがある。

(2) A 「駅前の交差点で **事故が** あったよ」

B 「**救急車は** すぐ来たの？」

- (3) A 「だいぶ暖くなりましたね」
B 「桜は」そろそろ咲きますかねえ」

(2)のAの発話にある「事故」は聞き手にとって《新規》に導入された情報であり、「が」でマークされているのは〈new information〉だからと説明できるだろう。しかし、(2)のBの発話にある「救急車」は given の情報ではないのに「は」が付いており、(3)の「桜」も同様である。「救急車」も「桜」も世界知識の一部であり、長期記憶内に収蔵されている情報であるが、この談話の場に新たに導入された情報であり、扱いは「事故」と変わらないはずである。

これらはむしろ「活性」という点で考えるべきである。(2)の「事故」は新規に提示されており、聞き手にとっては活性化されていない情報であるが、(2)Bの「救急車」は「事故」をトリガーにして関連情報として活性化されており、Aの発話のあとではAもBも活性化されている情報として「救急車」をとらえることができる。また、(3)の「桜」もAの発話をトリガーとして活性化された情報である。従って、「は」が活性化されている情報をマークすると考えるのであれば、新規の情報でも「は」でマークするが可能だといえる。

- (4) A 「駅前の交差点で事故が あったよ」
B 「?取材ヘリ」は飛んでた？」

もしも(4)のBの「取材ヘリ」が唐突に感じたり、不自然に感じたりするのだとしたら、「事故」から容易に活性化される情報ではないからだと思われるが、「取材ヘリ」を「事故」をトリガーに活性化する道理は理解できなくはない。

- (5) A 「駅前の交差点で事故が あったよ」
B 「???満月」は出てた？」

もしも、(5)のBが「統計によると満月の夜には交通事故が多い」という知識に基づいて、「事故」をトリガーに「満月」を活性化しても、多くの人にはこの活性化は共有されないであろうし、従って、きわめて唐突で不適切に響くことになる。

(2)Aの発話では「事故」が焦点であるため、「事故」が最も強力なトリガーになると考えられるが、「駅前」や「交差点」をトリガーにすることも可能である。これらをトリガーにして活性化する情報は、多くの人の間で共通していて一般化できるものもあれば、かなり個人的な知識や体験に基づいて活性化される知識などもありうる。また、活性化の度合いも言語使用者のあいだで変異があることが想定される。

1.3. 加藤（2006b）での修正

主に話しことばを耳で聞いて理解することを念頭に考えると、私たちは相手の発話が始まった段階で暫定的な解釈に着手していると考えることができる。

(6) A 「高橋君は来るのかな？」

B 「高橋君は来ないとは考えられないな」

この(6)のBの発話では「高橋君は来ない」までを聞いた時点で「来ない」という解釈を暫定的に行うかもしれないが、そのあとを発話の終わりまで聞いて、《再解釈》を行うことになる。再解釈が適切に行われるには、相手の発話をそのままの形で一時的に解釈が確定するまでとどめておくことが必要である。加藤重広（2002b）では、これを担当する《バッファ記憶》を、短期記憶とは別に想定するべきだと考えている。認知心理学における短期記憶は、無意味文字列を一時的に記憶するようなしくみとして想定されているのが一般的なので、加藤（2002b）でいう《バッファ記憶》がむしろ短期記憶に相当すると見なすべきなのかもしれない。

ただ、会話のやりとり（これを1つのセッションとする）において、提示

された情報は原則として会話の参加者の間で共有されていると考えてよいだろう。

(7) A「今日はこれからアルバイトの面接なんだ」

B「それで、ネクタイなんかしているわけね」

(…数分ほど別の話題で話をする…)

B「あれ、なんでネクタイなんかしてる {*/の/んだっけ}?」

(8) 形式文脈情報のメタ保持義務

会話の参加者は、談話のセッション開始以後に形成された形式文脈に含まれる一次情報は、セッションが継続するあいだ共有していなければならないという義務があることを無視してはいけない。

このやりとりにおいて、「ネクタイなんかしているの?」とBが聞くことは、(8)の形式文脈情報を共有していなければならないという義務に違反することになり、相手が形式文脈を共有しているべきだというメタ情報も無視していることになるので、不適切である。この義務は、基本的にメタ保持の義務なので、情報そのものを忘れてしまっても、共有しているべきであるという義務を忘れていなければ、違反にはならない。従って、(7)において、「なんでネクタイなんかしているんだっけ?」なら、共有しているはずであることはわかっており(メタ保持の義務は守られている)、共有しているはずの情報の内容を保持できなかった(情報内容の保持の失行のみ)ということなので、不適切にはならない。

つまり、認知心理学とは違う枠組みで、語用論では談話のセッションにおける情報を収蔵しておくところという概念が必要であり、これを《短期記憶》と呼ぶかどうかは検討する余地があるとして、《長期記憶》とは区別しておく方がよいと思われる。少なくとも、ここでいう《短期記憶》は《バッファ記憶》とは異なり、言語形式をそのまま保持しているわけではなく、情報の内容を保持しやすい形式にして暫定的に保持しているだけで、復唱できるように保持しているのとは異なる。《バッファ記憶》は発話の解釈が終われば、保

持する必要がない（からといってすぐに忘れ去るとは限らないが）ものであるが、《短期記憶》のなかの情報は、《長期記憶》に収蔵している情報との相互作用が考えられるので、必要に応じて《長期記憶》に繰り込まれるものもある。そして、この「繰り込み」は談話のセッションの進行中にもなされている可能性が十分に考えられる。

また、トリガーと活性化された情報は、認知心理学でいうプライミングとターゲットの関係にあたり、活性化はプライミング効果 (priming effect) に類似している。ここでは、意図的に、また、選択的にターゲットが決まる関係ではないと考えられるため、「プライミング」と「ターゲット」を用語として使うことは見合わせている。この点は、機会を改めて検討したい。

以上を踏まえて、加藤 (2006b) では、《短期記憶》が認知心理学での《短期記憶》の概念と少しく異なることが誤解されないよう、《談話記憶》と言い換えている。そして、ここで《バッファ記憶》と呼んでいるものを《処理記憶》と呼び変えて、刺激としての文が、処理記憶に入り、そこから談話記憶に送り込まれ、いずれの段階にも長期記憶が関わるというモデルを示している。加藤 (2006b) の定義を、処理記憶 (processing memory) ・談話記憶 (discourse memory) ・長期記憶 (long-term memory) ごとに引用すると以下のようになる⁶。

- (9) 処理記憶…聴覚刺激として捕捉した言語音を原形のまま処理が済むまで保持する。単位処理が終了後は保持不要。要領に限界があると考えられる。処理された情報は談話記憶へ移行。処理を行うには、長期記憶にある言語知識と世界知識を参照し、あわせて推論を行う。
- (10) 談話記憶…形式文脈（単位処理が済んだ言語情報）と状況文脈をセッションが終わるまで保持する。原則として、保持している情報は当該の発話の「文脈」をなすものであって、すべて「会話参加者間で共有

⁶ 加藤 (2006b) では表で示しているが、ここでは引用の方法を変えている。但し、内容は変えていない。

されて」おり、「活性化されている」と考えたい。随時長期記憶の更新に活用される。容量にはほとんど限界がないか、かなり大きいと考えられる。

- (11) 長期記憶…セッション開始前から会話参加者が持っている世界知識で、場面に影響されないもの。また、共有度の高い情報からほとんど共有されていない情報まであり、共有度は一定ではない。セッション開始後も永続的に保持され続けるが、談話記憶からの情報を取り入れて、常に世界についての知識は更新されている。談話記憶領域での必要な情報を取り込んで、追加・修正などを行い、知識体系は普段の更新状態にある。記憶の量が膨大であることから「一部のみが活性化している」と考えられる。

2. 長期記憶参照の例

本論では、長期記憶に関わる情報であることが、日本語においては重要な要素となると考えている。ここでは、《長期記憶》という認知処理上の領域を想定することの必要性を確認するために、指示詞の機能について検討する。

- (12) 「昨夜の会議，あのあと，どうなりました？」
 (13) A 「被害者の会田桃子を知ってるな？」
 B 「{そんな/*あんな} 人，知りませんよ
 (14) A 「被害者の会田桃子を知ってるな？」
 B 「{その/あの} 人なら知り合いです」
 (15) 昨日神田で火事があったよ。あの火事のことだから人が何人も死んだと思うよ。(黒田成幸 (1979)，枠囲いは引用者による)

松下大三郎 (1930) や久野暉 (1973) では、この用法のア系指示詞は聞き手と話し手が共有している知識の中にある場合にしか使えないとする。この説明は、(12)–(15)にはうまく当てはまるように思われるが、(15)では聞き手が知ら

ない場合の発話でも成立しうる。また、(16)では相手が知らないことを承知の上でア系指示詞を使っている。

- (16) A 「君は、哲学の坂部先生を知っていますか」
B 「ちょっと、わかりませんが」
A 「あの先生を知らないなんて、だいぶ不勉強だな」

共有知識を条件とするという考えは、堀口和吉 (1978) や黒田成幸 (1978) などですでに否定されている。もちろん、相手が知っているかどうか分からないのに、「ねえ、あれ、あれ、貸して」「ほら、あの女優さん、きれいだよねえ。ほら、なんて言ったかな、あの女優さんの名前…」のように使うのは、情報伝達上の（軽微な）違反であり、親しい間柄では許されても、新聞の文章などでは許されないだけのことだろう。

加藤重広 (2004b) では、この種のア系指示を、先行詞を持たない《非照応》の用法として分類している。これは、談話の冒頭でいきなり「あの火事、知ってるか？」のように使うことが可能であり、「あのころはよかったなあ」のように指示対象が言語的に明示されなくても使用可能であることを踏まえているためであるが、難しいのは「知っている」の定義である。

- (17) A 「君は、哲学の坂部先生を知っていますか」
B 「{???あの/その}先生でしたら、お会いしたことはありませんが、お名前は存じ上げております」
(18) A 「君は、哲学の坂部先生を知っていますか」
B 「{あの/その}先生でしたら、よくは存じ上げませんが、ときどきお見かけします」

(17)ではすでに提示されている名前だけしか知らないので新たに「長期記憶内の情報を検索して呼び出すことができない」ためにア系指示詞は適切でないが、(18)は名前を提示されたあとに、「視覚的な情報を長期記憶内で検索し、

引き出すことが可能」なのでア系指示詞が使えと考えられる。しかも、ア系指示詞が「あの人」や「あれ」など呼称や名称の引き出しに失敗しても使用可能であるということは、ア系指示詞が「長期記憶内の情報の検索に取りかかっていることのマーカ―」なのであって、長期記憶内から引き出すこと（検索の成功と遂行）が必要条件ではないことを意味している。

長期記憶内の情報の検索をかけるということは、その前提として、長期記憶内に情報が収蔵されているというメタ情報があるということである。あることがわかっている情報を探すのであるから、たいていの場合は、情報の発見と引き出しに成功するであろう。また、「あの人とあのあとあれでも盛り上がっちゃってさあ」のような言い方が独りよがり聞こえるのは、相手の知っている情報でなければ通じないか相手に疎外感を与えかねない以上は聞き手が知っていると思われる情報についてア系指示詞で指すのが理想ではあるからであろう。しかし、これらの条件は必須の条件ではなく、ア系指示詞の本質は「長期記憶の検索を開始したことを示す」ことにあると見るべきだと考える。

また、次の例でわかるように、長期記憶での検索を開始すればいいので、その検索が成功しなくてもア系指示詞を使うことは可能である。

- (19) あの俳優、なんて名前だったかな…ちょっと思い出せないけど、ほら、あのAって映画に主演してたあの俳優がね…

ここでは、結局指示対象と直接結びつく名詞（この場合は固有名詞）の検索に失敗しており、思い出すことができないままである。しかし、ア系指示詞の使用は不適格にはならない。

3. タ形の用法

日本語のタの機能は、テンスとアスペクトが不分明であるケースを斟酌しても、いずれの用法とも分類できない用法があることを認めなければなら

いようである。

- (20) 太郎は、昨年高校を卒業した。
- (21) やっとレポートを提出したよ。
- (22) 学校帰りによく映画を見た。
- (23) 祖父は職人気質で曲がったことが嫌いだった。
- (24) じゃあ、{頼んだ/頼む} よ。(森田 (1989: 617))
- (25) ずっとここに {いる/いた} んです。
- (26) どこに行ったのかと思ってたけど、こんなところに{ある/あった}ぞ。
- (27) 次の交差点、右折できたよね？

タ形が過去の動作・状態を表すテンスの用法 (…①) と、動作の完了を表すアスペクトの用法 (…②) を認めることは、一般に行われていると見ていいだろう。もちろん、テンスを基本用法として、派生的に完了をとらえる工藤真由美 (1995) や井上優 (2001) も、テンスとは区別されるものとアスペクトをとらえていると見られる。

(20)は過去の行為であり、その意味ではテンスのタ (…①) である⁷。(21)は行為・動作の終了・完了を意味しており、アスペクトのタ (…②) と言っているだろうが、もちろん、発話時点から見ればごく短い経過時間ではあるが、過去の行為と言えなくもない。タの場合、単純な完了と認めにくいのは、視点の置かれる時点で《確定》事態でなければならないため、未来については「花子はこの会社に明日でまる5年勤め^た」のように単独で使えず、「明日でまる5年勤め^たことになる」のように確定でないことを示す要素が必要になるからである。連体修飾のタ形が主としてアスペクト用法であることはこのことと関わりを持つと考えられるが、連体修飾の用法は、ここでは除外し

⁷ ほぼ同じ内容を「卒業している」とテイル形でも表せる。これは、経験や記録などを表す用法、あるいはパーフェクティブなどと呼ばれる用法で興味深い⁷が、ここでは扱わない。

て考えることにする。

(22)は過去の習慣であり、工藤（1995）でいう派生的な《反復性》の用法であり、加藤重広（2009, to appear）で《外的アスペクト》と呼ぶものである。これは、特定の動作の過去性ではなく、動作そのものの過去性を表す用法であり、動作の特定性という条件をはずせば得られる派生的なテンス用法（…③）であると言える。(23)は状態性の述語であり、同じく過去のテンス用法に分類できるが、動作や事象の特定性が低いという点では③に近いと見てよいだろう。

(24)は、「頼んだよ」とタを用いると、事態の確定あるいはそれを確認する意味合いになり、森田良行（1989）では「確かめ」と呼ばれる用法になる。これは、発話時点で「頼む」行為をしているもので、過去の動作ではない。ただ、すでに確定した動作として表明することで強意・確認・確述といった意味を帯びると考えられるので、派生的なアスペクトの用法（…④）とすることができる。森田（1989：617）は(24)も④と同じ用法に分類し、非タ形では「主観的知覚として表出・主張」するもので、タ形は「客観的事実を経験として報告し、間接的で確かめの念が強い」としている。これも事態の確定という意味では、確定して実現した状態の継続・残存として見て、派生的なアスペクトの用法（…④）とすることはできるだろう。

(26)はいわゆる「発見の用法」と呼ばれるものである。井上（2001）では、「ムード的な『…タ』」のなかに「発見」の用法を含めている。これは「明らかになった時点ですでに事態が確定している」ケースで、「あっ、ここにあった」と発見した時点で「ある」という事態が確定していることをタがマークするものとできるだろう。これには、「やっぱり、あいつの仕業だったか」のような予測的の中（森田（1989））と呼ばれる用法も含められるし、井上（2001）が、「正解を明らかにする用法」とする「正解は3番でした」のような用法も含められる。これは、広い意味では派生的なアスペクトの用法（…⑤）であるが、アスペクト以外の意味、井上（2001）がいうようなムードに関わる意味もかなり帯びていると言えるのではないだろうか。

また、「気づき」や「思いだし」といわれている以下のような用法も⑤の一

種である。

(28) そうだ。戸棚におやつがあった。

⑤は、「すでに確定事態があり、明らかになるまで確定事態のことが全くわからず、一気に急に明らかになるもののその時点ではすでに事態は確定している」とみて、アスペクトの用法に含めることができるわけである。このほかに、「さあ、買った、買った」「おい、どいた、どいた」のような使い方が見られ、《差し迫った要求》などと説明される。これは、他の用法に比べると生産的でなく、敬体では使われないなど制限もあることから、一種の慣用法あるいは周辺の用法としておいていいように思う。確定してない状況であるのに、確定したことを表すタ形を逸脱的に使うことで、命令のモダリティを持つという点で、派生的なアスペクト用法の一種（…⑥）とすることはできるだろうが、あえて独立した用法として考えないこともできる。

ここで特に取り上げたいのは、(27)のような用法である。これは、「進行方向の間近にある交差点が右折可能である」ことを確認している発話だと言えるが、「右折可能」という事態には《確定》ということではなく、もともと「右折可能である」か「右折可能でない」かのいずれかであって、これは時間軸上で事態が「そうなる」というような確定や完了の概念で捉えられるものではない。つまり、この用法は、そのみを単独で考えれば、テンス用法（やその派生用法）でもアスペクト用法（やその派生用法）でもないと考えられる。

加藤（2006a）は、タの用法を以下のように分けている。

タの用法			
①時制	②アスペクト	③モダリティ	④文法機能
過去	完了	思い出し	形容表現化

ここで言う④の用法は連体修飾の場合にしか見られない用法である。

- (29) 窓から乾いた風が吹き込む。
- (30) 曲がりくねった道を進む。

これらは述定であれば、タをテイルに変えなければならない。つまり、述定のタにはない用法である。加藤(2006a)における③モダリティの用法とされるタは、ここで言う思い出しの他に発見の用法も含んでいる。実は、これらをモダリティの一種とするかどうかは、議論が必要である。モダリティの再定義も含めて、検討することを考えているが、別の機会に譲りたい。また、タを単純にテンスとしたり、アスペクトとしたりすることも避けるべきだと考えており、加藤(2006a)は現状でのわかりやすい区分への単純化に過ぎないが、これも別の機会に論じることにし、ここでは、この思い出しの用法をモダリティ用法として話を進める。

4. モダリティ用法としての長期記憶参照標示 ― 条件と特性 ―

このモダリティ用法は、森田(1989)で「想起」と呼んでいるものとおおよそ重なるが、いくつかの条件と特徴があると考えられる。

- (31) 正門は午後 11 時で閉まったかなあ。
- (32) 銀座線に日本橋で乗り換えられたっけ？
- (33) 埼玉県に海はなかったはずだ。

まず、これらのタ形は使用せずとも不適切にならない。これらはそれぞれ「閉まるかなあ」「乗り換えられるっけ」「ないはずだ」とすることに問題がない。タ形と非タ形がともに可能であるという点は、④や⑤にも当てはまる。

(31)の「閉まる」は特定の出来事を指しているのではなく、閉門時間という属性を指すのに用いられている。(32)は「乗り換えられる」という可能の属性であり、(33)は地理的属性である。(27)の「次の交差点、右折できたよね？」も

右折可能という属性と言える。属性や状態であれば、特定時の特定の出来事（加藤（2003）でいう「テンスを持っている」事象）ではないことになる。これは単純化して言えば、このモダリティ用法のタは状態性の述語に付くということである。

- (34) うちのベランダから富士山が見えたかな？
- (35) 確か、うちの学校には、獣医学科はなかったなあ。
- (36) 太郎は酒に強かったよな？
- (37) この絵、確か、すごく高価だったよ。
- (38) 妹さんは、確か大学一年だったよね。
- (39) 花子は、犬を飼ってたっけ？
- (40) 次郎は、もう運転免許とってたっけ？
- (41) そういえば、明日の午後、教務委員会があったぞ。

これらは思い出し以外の解釈も可能なものが含まれているが、ここでは思い出しの用法だとしよう。思い出しの用法はタ形を非タ形に戻しても成立することである。非タ形にすると、思い出しの意味合いはもちろなくなるが、以下に見るように、同じ内容を表すものとして成立する。

- (42) うちのベランダから富士山が見えるかな？
- (43) 確か、うちの学校には、獣医学科はないなあ。
- (44) 太郎は酒に強いよな？
- (45) この絵、確か、すごく高価だよ。
- (46) 妹さんは、確か大学一年だよ。
- (47) 花子は、犬を飼ってるっけ？
- (48) 次郎は、もう運転免許とってるっけ？
- (49) そういえば、明日の午後、教務委員会があるぞ。

また、(34)–(41)は、いずれもタが状態性の述語に後接している。(34)は可能の意

の述語、(35)は非存在をあらわす形容詞の「ない」、(36)は形容詞、(37)は形容動詞、(38)名詞述語、(39)は動作継続のテイル形、(40)は結果状態のテイル形、(41)は「ある」という状態動詞、であり、いずれも状態性の述語である。

- (50) うちのベランダから富士山を見たかな？
- (51) 太郎は一人で一升飲んだよな？
- (52) 花子は犬を飼ったよね？
- (53) *明日の午後、教務委員会が開催されたぞ。

動作性の述部であれば、タをつけることで過去の事態を表すことになってしまい、ル形と時制において対立関係が保持される。このことは、モダリティ用法のタが状態性述語にしか後接できないことを示している。そこでこの点を(54)のようにまとめておく。

(54) モダリティ用法（思い出し）のタの承接制約

モダリティ用法のタは、非過去事象の場合、状態性の述語に後接しなければならない。

この用法のタは、現在や未来の事象について述べる場合、動作性の述語につくと、テンス（あるいはアスペクト）の用法になり、非過去の事態を表す思い出しにはならないのである。その意味では、現象としては形態論的制約だが、制約の実質は意味的なものと見るべきだろう。

では、モダリティ用法のタでは、現在の事態しか表せないかということ、そんなことはない。

- (55) 確か、今、花子は犬を飼ってたよね？
- (56) 確か、昔、花子は犬を飼ってたよね？
- (57) 今年のクラスでは、確か、太郎が一番酒が強かったよな？
- (58) 去年のクラスでは、確か、太郎が一番酒が強かったよな？

以上に見るように、思い出しでは時制の対立がなくなり、現在なのか過去なのかといった時制は、副詞的に限定することは許されるが、対立そのものがなくなるのである。つまり、思い出しのタの前の状態性述部では時制の対立が失われることになる。言語学では、対立関係が失われることを中和というので、これを**時制中和**と呼ぶことにしたい。

時制中和が生じるため、次のように、時間を限定する要素を取り去ると意味が通じなくなるような文でも同じ状態性述語＋タを複数回用いて成立することになる。

- (59) 去年のクラスじゃ、太郎が一番酒が強かっただろ？ でもさ、今年のクラスじゃ次郎が、確か一番酒が強かったよな？

ここで、以下のように(54)に追記を行う。

(60) **モダリティ用法（思い出し）のタによる時制中和**

モダリティ用法のタは状態性の述語の時制を中和し、過去の状態でも非過去（現在）の状態でも、形態論上同じように標示する。

整理すると、状態性述語のタ形は、(A) 非過去の事態についての想起と、(B) 過去の事態についての想起とがあるわけだが、もちろん、想起ではない用法として (C) 過去の事態の叙述もある。述定（非修飾）の場合は、非過去の事態で想起でもなければ、タ形は使えない。以下の表で分かるように、ここで言う時制中和は (B) と (A) の間で生じることである。(B) は、タ形のテンス機能とモダリティ機能を両方利用しているが、それを単一のタ形の形態で表しており、タ形に2つの機能が混在していると見ることができる。各地の方言ではタ形を重ねたと見うる「たった」が見られるが、この点も別の機会に考察したい。

タ形の長期記憶参照標識機能

		想起	
		想起用法	非想起用法
過去	過去事態	○ (B)	○ (C)
	非過去事態	○ (A)	×

ここで重要なのは、(A) (B) (C)のうち、いずれが無標の用法かということである。

- (61) 昨日の授業に太郎は出席した。
- (62) 確か、昨日の授業に太郎は出席したよ。
- (63) 確か、昨日の授業に太郎は出席してたよ。
- (64) 確か、A先生は1995年に亡くなったよ。
- (65) *確か、A先生は1995年に亡くなっていたよ。
- (66) 確か、A先生は1995年に亡くなったんだったよ。

例文(61)を見る限り、この文の無標の解釈は(C)であり、「出席する」という行為・事象が過去においてあったということである。(62)のように「確か」を付加することで「思い出し」という解釈が可能になり、(B)の解釈も可能になるが、これはそれほど自然ではなく、(63)のように述部をテイル形（ここでは会話体につきテル形）にしたほうが自然である。(B)用法は、いわば1形態に2機能を重ねる用法であるから、明らかに機能上有標であり、機能負担の過重さが状態性述語によってモダリティ用法であることを解釈しやすいよう形式上のマーキングを要求すると考えることができる。(62)と(63)は加藤(2009, to appear)に言う《外的アスペクト》と《内的アスペクト》の違いでもあるから、意味が異なり、(63)は出席している最中に現認したことになる。しかし、出席の有無にかかわる情報としてはほぼ同様な価値を持つ。

問題は、状態性の意味属性を持たない述部、典型的には動作性の述部について、タ形によるモダリティ用法は不可能なのか、ということであろう。(64)は「死ぬ」の意の瞬間動詞で、開始限界と終了限界が分離していない動詞で

あるから、テイル形は東京方言では結果状態にのみ解釈される。(64)は「確か」がなければ、(C)の過去の事態の叙述になるが、「確か」を伴うことで、それに「想起性」が付与される。これは、「確か」がなければ思い出しと解釈できないことから、タ形によって想起と解釈されているのではないことが分かる。過去の事態については、それを叙述しつつ、想起することに矛盾がないので、語用論的な制約が生じないに過ぎない。つまり、(64)は、単なる過去の事態の叙述（ここで言う(C)の用法)であって、それを(B)と同じように解釈することに制約がかからず、許されているだけだと見ればよい。(65)は「1995年には」とすれば、異なる意味で可能になるが、このままでは不適格である。しかし、(66)のように「のだ」を使うことで可能になるケースが見られる。「のだ」の機能については、種々の先行研究があるが、このような用法があることの指摘にここではとどめる。

もう少し別の用例を見てみよう。

- (67) 金曜日に、体育 {あった/ある} かな？
- (68) 明日、図工 {あった/ある} かな？
- (69) 昨日、図工 {あった/*ある} かな？

(67)は毎週のことだとすれば、習慣や予定とでも言うべきものであるから、時間割やカリキュラムの属性と見て、状態性述語とすることができる。(68)は未来のことであるから、特定時のことではあるが、事態としてはまだ「図工の授業は行われていない」ので、完了も確定もしておらず、事実化していない。つまり、理念的に予定としてあるにすぎない。これに対して、(69)は過去の事実であり、すでに「図工がある(=図工の授業が行われる)」ということは完了・確定したことである。このとき(69)では非タ形(ル形)を使うと、過去にもならず、思い出しにもならず、不適格になる。

そして、思い出しであるということは、まさしく長期記憶に収蔵済みの情報を参照しているということになる。

- (70) 【初めて通る道。車を運転しながら交差点に差しかかる。助手席にいる友人に言う。】

「この交差点、右折 {できる/*できた} よね？」

- (71) 【以前に何度か通ったことのある道。車を運転しながら交差点に差しかかる。助手席にいる友人に言う。】

「この交差点、右折 {できる/できた} よね？」

(70)では、初めての交差点であることから、交通標識などや他の車の動きなどからその時点で「右折できる」と判断するしかなく、参照すべき情報が長期記憶に収蔵されていないケースである。これに対して、(71)では以前通った際の経験に基づく記憶があり、その情報が長期記憶に収蔵されているので、参照すべき情報を持っていることになる。つまり、この第三の用法のタは、長期記憶内に参照すべき情報がある場合しか使えないことから、長期記憶内の情報を参照していることを示すマーカーだと考えられるわけである。

もちろん、記憶は直接的な実体験に基づくものでなくともよい。

- (72) 【初めて通る道だが、前夜地図を見てルートについて調べてある。車を運転しながら交差点に差しかかる。助手席にいる友人に言う。】

「この交差点、確か右折 {できる/できた} よね？ 昨日見た地図にはそう載ってたような気がするんだけど」

(72)では、地図を見ることによって事前に情報を入手しているケースであるが、この場合にもタは使える。つまり、入手先や入手経路などといった《情報の出自》は問われないのであって、長期記憶内に情報が収蔵されていればいいのである。

では、なぜ長期記憶参照をわざわざマークするのだろうか。(71)は、「この交差点、右折できるよね？」と非タ形にした発話でも、長期記憶の情報を参照していることは十分に考えられる。わざわざ長期記憶の情報を参照したことをマークするのは、発話において判断の根拠を示すことが必要な場合がある

からであろう。

(73) 【書類で確認して】

「1995 年の生まれ {です/*でした} ね？」

もしも目の前に根拠になる情報が記載されているのであればタ形は使わない。タ形が使えるのは、書類があっても該当の情報の記載場所が見つからないなどの理由で、自分の長期記憶を参照している場合であろう。状況文脈で確定できるのであれば、長期記憶の情報を検索したり参照したりする必要はない。

(74) 「#あなたは男性 {です/でした} よね？」

相手が男性かどうかはたいはいは誤って記憶されることが少ない情報であり、しかも、多くの場合対面していれば、視覚的・聴覚的情報でも判断・確認できることから、長期記憶を参照する必要はない。長期記憶をわざわざ参照するのは、「あなたは男性だ」ということに疑念が生じた場合であり、「この人は記憶によると確か男性であるはずなんだが、それでいいのか？」と考えるような場合である。自分が長期記憶を参照していることを意識することなく多くの判断が下されることを考えれば、あえてそれを意識するということは、判断に疑念の生じる余地があり、断言したり、確述したりできないからであろう。

「あの人は、たしか仙台出身だったよなあ」「あそこのスーパーでは、牛乳が1本120円だったんじゃないかな」のように断言しないことを示すと解釈できるモダリティ形式と共起しやすいことは、長期記憶参照をマークするタ形が「長期記憶の検索と参照が必要とされる陳述であり、確認が必要で根拠なしで確信が持てない」こと表していると考えられる状況証拠になる。

思い出しながら言うということは、長期記憶の情報を参照しなければならぬくらいに、即座に判断できないような命題だということにもなる。従っ

て、多くの場合に、断言できないような言い方になり、「確か」などのように思い出しのマーカーが付いたり、「かな」「っけ」「よなあ」のような文末形を伴うことが多い。しかし、これは単なる傾向であって、明確な制約とは考えない方がいいであろう。

5. 関連する問題 ― 記憶の定義と用法の揺れ ―

日常の言語行動において、自分の持っている情報や知識があやふやになって確定的な判断を下しかねるという事態に逢着することはそれほどめずらしいことではない。

(75) A 「先方の電話番号は、03-○×△□-○×△□です」

B 「はい、ええと、03-○×△□-○×△□ {です/???でした} ね？」

直前のAの発話から得られた情報はまだその談話のセッションが続いている以上《談話記憶》に所蔵されていると考えられる。ここで「でしたね？」とタ形が成立するには、直前のAの発話にある情報がすでに《長期記憶》に転送されていることになり、Bの発話が直前のAの発話とは別の談話セッションに所属していなければならない。しかし、Bの発話は明らかにAの発話に応じる形式と内容の発話であるから、矛盾してしまう。

しかし、近年本来長期記憶参照をマークするはずのタが、参照すべき長期記憶情報が存在しないままに用いられるケースが見られる。

(76) 【喫茶店で】

客「アメリカン1つ」

スタッフ「はい、アメリカン1つでよろしかったですか」

筆者はこのようなタを俗に「丁寧のタ」と呼んでいるが、これは本来の長期記憶参照用法から派生した逸脱的な用法だと考えられる。

(77) 【なじみの居酒屋に 10 人の予約を入れてある。】

客「こんにちはー」

大将「いらっしゃい。10 人だったよね？」

これは、事前に聞いていた情報が長期記憶にあり、それを参照しているケースである。このタを使うことで、「事前に聞いている(ということを覚えている)」ことから、すでに客として受け入れているというニュアンスが感じられ、それが配慮や尊重があることを窺わせる。その結果、客が丁寧な印象・丁寧な扱いという印象をもつことは十分ありうるだろう。

(78) 【ホテルのフロントにて。客は、事前に宿泊を予約してある。】

客「あの、加藤と申しますが」

スタッフ「はい、加藤様ですね。【予約のあることを確認し】はい、本日からご一泊でよろしかったでしょうか」

この場合は、対応のフロント・スタッフの個人の長期記憶のなかに、加藤という客が 1 泊の予定で宿泊するという情報はないのが普通であり、確認はしているが、これは記録されていることを確認しているのであって、その場で情報を照合しながら「よろしかったでしょうか」と言っているに過ぎない。しかし、小規模の宿泊施設で客が少なければ、主人や女将がある程度予約の内容を把握していることはあり得るだろうし、客に対する態度としてはこれが理想であろう。おなじ考え方をするなら、ホテルの従業員があたかも自分の長期記憶に既に収蔵済みであるかのようにすることで、「すでに知っており、確かに、予約がありましたねえ」と自分で確認するかのごとく振る舞うことは、宿泊施設の人間として括ってしまえば許されることだろう。(78)について、特に違和感がないのは、多少長期記憶参照マーカーというタの用法を逸脱しているものの、事前に長期記憶に収蔵すべき情報があることもあり、許容の範囲と判断されるからだと思われる。

しかし、(76)では、そもそも談話のセッションが完結しておらず、事前に注

文をしているわけでもないから、長期記憶に収蔵されている情報がない。それであるにも関わらず、タを使っていることが、許容範囲を逸脱すると感じる人には、奇異に感じられることになる。

とは言え、この種の「丁寧のタ」が用いられるのには、理由があると思われる。これは、理論的には《長期記憶参照》という条件を満たしていないが、長期記憶参照によって生じる「丁寧な扱い」や「配慮・気遣い・丁寧さ」というニュアンスは活用でき、また、前節で指摘したように「断言や確述を避ける」というニュアンスも活かすことができるだろう。これは、加藤（2002 a）で「（言語変化における）正の動機」と呼ぶ要因だと考えられるが、本来の機能である長期記憶情報参照のマークを無視して、その効果のみを利用している点が特徴だと言えよう。このタ形を用いることによって、すでに相手を客として高く待遇すべきであることを示しているのであれば、Brown and Levinson (1987) でいう positive politeness に分類すべきだと考えられるが、この点も別の機会に詳しく論じたいと思う。

6. 終わりに

本論では、タのモダリティ用法として長期記憶参照のマーキングが考えられることを示し、関連することについて述べた。長期記憶と談話記憶の言語学的な定義と扱いについては、まだ検討と精緻化の余地があると考えられるので、別稿で詳論したい。特に、談話記憶にある情報が長期記憶にも二重に収蔵されていることがあると考えるべきか、情報の転送・移行はいつ、どのように行われるのか、について明らかにしておく必要があるだろうと思われる。また、談話におけるセッションをどう理解すべきか、長時間にわたる会話では談話記憶をどのように考えればよいかなど、課題は少なくない。これらについて、ある程度まとまった枠組みができれば、この点から認知心理学における記憶の枠組みにフィードバックできることもあるのではないかと考えている。

参考文献

- 井上優(2001) 「現代日本語の「タ」」 『「た」の言語学』 つくば言語文化フォーラム編 ひつじ書房 pp. 97-163
- 苅阪満里子(2002) 『ワーキングメモリー』 新曜社
- 加藤重広(2002a) 「言語使用における動機のあり方について」 『富山大学人文学部紀要』 36号
- 加藤重広(2002b) 「線条性の再検討」 (東京外国語大学共同研究プロジェクト『言語基礎論の構築』研究発表ハンドアウト 未公表 ただし、要旨は『通信』第107号 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 2003に掲載)
- 加藤重広(2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房
- 加藤重広(2004a) 「長期記憶情報参照をマークするタ形の用法について」2004年3月 現代日本語意味論・文法論研究会発表資料(名古屋大学)
- 加藤重広(2004b) 『日本語語用論のしくみ』 研究社(町田健編)
- 加藤重広(2006a) 『日本語文法 入門ハンドブック』 ii+156 p., 研究社
- 加藤重広(2006b) 「線条性の再検討」 『言語基礎論の構築の構築へ向けて(東京外国語大学 AA 研共同研究プロジェクト報告書)』 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, pp.1-25
- 加藤重広(2007) 「記憶モデルと動的文脈の枠組み」 日本語用論学会第10回大会ワークショップ「動的語用論の展開」発表資料
- 加藤重広(2008a) 「長期記憶参照マーカーとしてのタの用法」 『科学研究費補助金・基盤研究(C)・研究報告書(平成17~19年度)(17520254) 日本語受動構文の構造的意味と推意に関する語用論の原理の記述的研究』 pp. 61-78, 北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座
- 加藤重広(2008b) 「記憶モデルと動的文脈の枠組み」 『日本語用論学会発表論文集(第10回記念大会)』, pp. 363-366, 日本語用論学会
- 加藤重広(2009, to appear) 「内的アスペクトと外的アスペクト」 『門脇誠一教授停年記念論集』 佐藤知巳編, 北海道大学出版会(刊行準備中)
- 工藤真由美(1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』 ひつじ書房
- 久野璋(1973) 『日本文法研究』 大修館書店
- 黒田成幸(1979) 「(コ)・ソ・アについて」 『林栄一教授還暦記念論集・英語と日本語と』 くろしお出版
- 坂原茂(2006) 「日本語裸名詞と英語定冠詞句との類似性」 『日本語文法学会第七回大会発表予稿集』 pp. 33-42, 日本語文法学会

- 田窪行則 (1996) 「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』Vol. 3, No. 3 pp. 59-74, 認知科学会
- 堀口和吉 (1978) 「指示語の表現性」『日本語・日本文化』8 大阪外国語大学
- 松下大三郎 (1930) 『増補校訂 標準日本口語法』紀元社 (勉誠社復刊)
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』角川書店

- Anderson, J.R. (1980) *Cognitive psychology and its implications*, Freeman and Company
- Atkinson, R.C. and Schiffrin, R.M. (1968) "Human memory: a proposed system and its control process," K.W. Spence and J.T. Spence (eds) *The psychology of learning and motivation*, Vol. 2, Academic Press
- Atkinson, R.C. and Schiffrin, R.M. (1971) "The control of short-term memory," *Scientific American* **225**, pp. 82-90
- Brown, Penelope and Levinson, Stephen (1987) *Politeness, some universals in language usage*, Cambridge: CUP
- Chafe, Wallace (1994) *Discourse, consciousness, and time*, The university of Chicago Press
- Eysenck (1986) "Working Memory," Cohen, G, Eysenck M.W. and LeVoi M. E. *Memory: A cognitive approach*, The Open University, UK
- James, W.(1890) *The principles of psychology*, Holt
- Salame, P. and Baddeley, A.D. (1982) "Disruption of short-term memory by unattended speech: Implications for the structure of working memory," *Journal of Verbal Learning Verbal Behavior*, **21**, pp. 150-164
- Wilson, R.A. and Frank C. Keil (ed) (1999) *The MIT Encyclopedia of the Cognitive Sciences*, The MIT Press